

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## チェロが弾けたら

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

日差しがますます強くなり、木陰にぼっとする7月、真夏を前に、室内楽にひととき親しんでみたくになります。楽器は何がいいでしょうか？やはり弦が、と思われでしょうか。今回はチェロを愛する方々とともにぜひ聞きたい名曲について、お話ししたいと思います。

ヴァイオリン、ヴィオラに続いてチェロは16世紀に現れ、100年後には独奏楽器となりました。低音から高音まで美しく奏でる叙情性豊かな音響に、聴き手はその心を捉えられています。

よく知られた作品と言いますと、サン＝サーンスの「白鳥」、フォーレの「ロマンス」、カザルスの「鳥の歌」などでしょうか。本格的なチェロ作品として有名なものというと、バッハの無伴奏チェロソナタが筆頭に上げられるかもしれません。ベートーヴェン、ブラームスなどはまさにチェロソナタの王道といったところですね。

### ラフマニノフのチェロソナタ

さてその他にじっくり聞いてみたい作品として、まずラフマニノフを取り上げましょう。チェロの名曲20選に音楽雑誌で選ばれたのですから、演奏会の人気レポートです。ラフマニノフ自身がピアノにおける超絶技巧奏者としても名高く、そのロシア的な曲想はとても感動的。ですからチェロ作品もまさにロマンあふれるのではと大いに期待させ、あらためて興味をもたれる方も多いのではないのでしょうか。チェロパートは演奏が不可能なほどではないけれど、さすがにラフマニノフの作品だけあって、ピアノは大変な技巧を要します。

この曲が作られた1901年にはピアノコンチェルト第2番が完成されています。ロシアの由緒ある貴族の家に生まれたラフマニノフは、ロシア音楽院を非常に優秀な成績で卒業し、音楽家の道を歩み始めましたが、1895年の交響曲第1番で大きな挫折を味わっています。初演でのオーケストラの不出来が作品そのものへの不評を招き、その痛手からなかなか立ち直れませんでした。

6年後、ピアノコンチェルト第2番の大成功で名声を一挙に手にし、その精神的充実の中で作られたのが、ラフマニノフ唯一のチェロソナタです。全体は4楽章で、いずれのチェロ主題も滑らかで甘美、叙情性にあふれ、豊かな音楽的表現が聴き手を酔わせます。それを支えるピアノはまさに技巧の限りを尽くしながら、それでいてロマンティックな音色にあふれるのですから、味わい深い室内楽を求める人にはうってつけのものとなっています。

### ショパンの親友はチェロの名手

チェロの音色を愛するピアノのヴィルトゥオーソの音楽家はラフマニノフだけではありません。ショパンもチェロソナタを晩年の1845年に作っているのです。それは親友がチェロの名手フランコムだったからで、ぜひ一緒に演奏したいと願ったのでしょう。ショパンが生前最後に出版した作品でもあり、その思い入れには特別なものがあつたのではないのでしょうか。1849年、死の床で望んだのは、チェロソナタをもう一度聴きたいというものでした。

全4楽章、低音から高音まで美しく奏でるチェロ、そして旋律をくつきりと歌うピアノの特性を充分に生かした傑作となっています。チェロが幅広く低音で歌っていると、高音で刺繍音のような細かい装飾的音型をピアノが奏でます。やがてチェロが高音に向かうと、ピアノが低音で歌うといったように、2つの楽器による広がりのある音程が、ショパン独特の精緻な豊かさを聞かせる音楽となっています。

### グリーグのチェロソナタ

さて最後は、やはりピアノの名手グリーグの作品です。とても仲のいい兄ジョンがチェロ愛好家なので、2人で演奏を楽しみたいと、1883年に完成されました。チェロの主題は北欧の自然を愛でるかのようで、響きは同じ音の繰り返しですが情緒をかもし出し、独特の美しさにあふれます。簡素でありながら、伸びやかなチェロの音響を生かした名曲は、やはり全4楽章から成ります。第1楽章と第2楽章の趣あふれる主題を最後にご紹介して、曲想を思い浮かべていただきます。

#### 第1楽章 第2主題 優雅にそして静けさをもって



#### 第2楽章 第1主題 とても静かに 美しさを秘めて



過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっと ねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。